

令和 2 年 6 月 10 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2019

課題番号：18K17519

研究課題名（和文）周囲の者との関係性が動機や幸福感に關与する日本人に適した療養支援方法の確立

研究課題名（英文）Self-management support for the patients in whom close relationship affects motivation and happiness

研究代表者

池田 香織（Ikeda, Kaori）

京都大学・医学研究科・特定病院助教

研究者番号：10706716

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：文化的背景は糖尿病療養に影響し得ると考えられる。西洋で個人の独立性が重視されているのに対し、東洋では協調性や社会的調和が重視される傾向がある。本研究から、日本人糖尿病患者において、協調性が高い人ほど自己療養行動が難しくなる傾向があること、周囲の親しい人々からのサポートを多く受けている人ほど自己療養行動が成功しやすいことが明らかになった。この関係は患者の年齢が若いほど強い可能性がある。糖尿病患者が周囲の親しい人からサポートを受けやすくなるような医療的介入方法が療養行動の改善に効果的と考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

糖尿病の患者の療養支援において、周囲からの理解や支援が受けられるように、患者の家族などに指導介入する方法は既に行われているが、この方法では効果の大きさや波及の範囲に限界があると推測される。今後は、周囲からの理解や支援が得られやすい患者自身に備わる要因について検討し、これを促進するべく患者自身に介入する方法を重視することで、これまでになかった介入方法が実現する可能性が高い。

研究成果の概要（英文）：Cultural background can influence diabetes self-care. In Eastern cultures, people tend to value interdependence of the self with others, social harmony and connection with others. Diabetes self-care activities had a negative correlation with interdependent tendency, and they had positive correlations with emotional support and diabetes self-care support. This tendency might be stronger in younger patients. Medical support which enhance patients ability to receive support from close people might be important.

研究分野：糖尿病学

キーワード：文化心理学

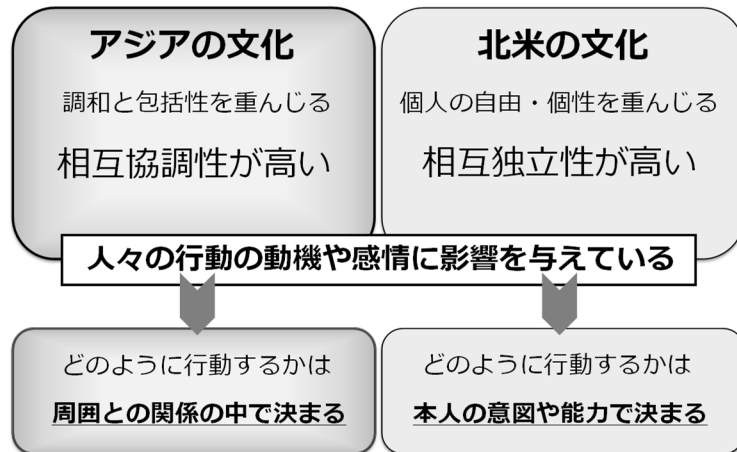
様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

生活習慣関連疾患の発症・進展予防のためには、個人の健康行動の維持が不可欠であるが、個人が健康に向かって努力し、達成する意欲のみをターゲットとする支援戦略では、効果に限界がある。様々な療養指導介入で得られる効果がしばしば6か月程度で介入前の状態に復してしまうのはそのためである。糖尿病患者の療養行動の成功には、文化や社会を背景とした人の考え方や感情も療養行動に大きく影響する。日本を含むアジア人は、周囲の人との関係性やつながりを重視する傾向があり、個人の目標達成を重視する北米人とは、行動の動機や感情が異なっている。療養指導において北米人で重視されるエンパワメント法では、患者をエンパワーするためには患者自身の主体的な意思決定を促すことが重要であると説かれるが、これは相互独立性の高い北米の文化でこそ有効であるが、相互協調性の高いアジアの文化では北米と同等の効果は期待できない。しかしこのことはまだ十分認識されておらず、エンパワメントを重視した指導方法が日本の教科書やガイドラインに記載され、理論的基盤となっている(糖尿病診療ガイドライン2016)。

このような背景を踏まえると、日本人における健康行動を効果的に長期間維持するための新たな理論的基盤の整備が重要である。日本人にとっては、相互協調性の高さから生じる、北米とは異なる動機や感情の成り立ちを踏まえたうえで、健康行動の促進因子を検討する研究が求められる。

日本人糖尿病患者では、周囲との協調を重視する人ほど糖尿病の心理負担が大きく、その負担を軽減するのは身近な周囲の者からの励ましや共感であることを、北米人患者との比較で既に把握している(Ikeda, Uchida. PLOS ONE, 2015)。そこで、そのような日本人糖尿病患者において自己療養行動を促進するための介入手法を確立する必要があると考えた。



文化・社会心理学における、アジアと北米の人々の行動の比較

2. 研究の目的

本研究では、周囲の者との関係性が行動や幸福感に關与する日本人の特徴を活用して支援する手法を開発する。

3. 研究の方法

日本人2型糖尿病患者161人を対象に、自己記入式質問紙を用いて、協調性、自己療養行動、感情的サポート、糖尿病自己療養サポートの程度について測定し、相互の関係について解析した。また、日本人糖尿病患者24人に対し、インタビュー調査を行い、自己療養の促進・阻害要因について検討した。

4. 研究成果

【解析対象者の特徴】

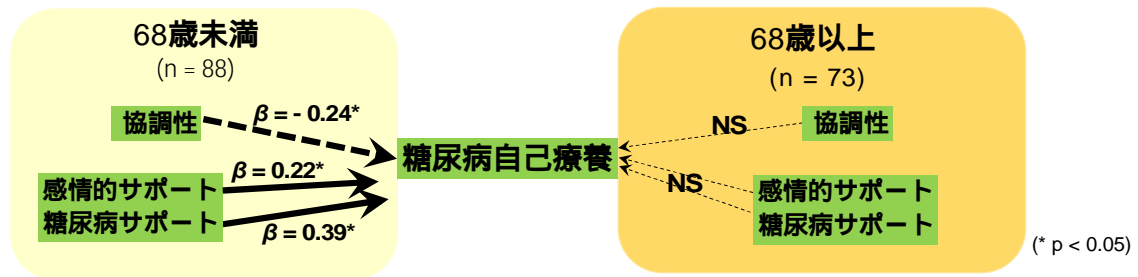
年齢の中央値で
2群に分けた



	全体	68歳未満	68歳以上
n	161	88	73
女性	57 (35.4%)	35 (39.8%)	22 (30.1%)
年齢(歳)	65.1±12.2	57.3±10.8	74.4±5.3
HbA1c (%)	7.5±1.2	7.6±1.3	7.3±0.9
糖尿病罹患歴	15.3±10.1	14.0±9.6	15.7±11.0
治療			
食事療法	16 (9.9%)	7 (8.0%)	9 (12.3%)
経口血糖降下薬	72 (44.7%)	40 (45.5%)	32 (43.8%)
注射治療のみ	30 (18.6%)	17 (19.3%)	13 (17.8%)
注射+経口薬	43 (26.7%)	24 (27.3%)	19 (26.0%)

平均値±SD

質問紙調査における相関解析から、自己療養行動は協調性($r = -0.16$, $P=0.047$)と負の相関を示し、年齢($r=0.42$, $P<0.001$)、感情的サポート($r=0.25$, $P=0.001$)、糖尿病自己療養サポート($r=0.36$, $P<0.001$)と正の相関を示した。療養行動は年齢層によって異なると推測されたため、年齢の中央値(68歳)で二群に分け、重回帰分析を行ったところ、68歳未満のグループでは、協調性($\beta = -0.20$, $P=0.048$)、男性($\beta = -0.24$, $P=0.023$)、感情的サポート($\beta = 0.22$, $P=0.028$)が自己療養行動の独立した予測因子であり、感情的サポートを糖尿病自己療養サポート($\beta = 0.39$, $P<0.001$)に置き換えた解析においても同様の結果であった。一方、68歳以上のグループではいずれも有意な予測因子ではなかった。さらに、68歳未満のグループを性別で二群に分けて重回帰分析を行ったところ、男性では感情的サポート($\beta = 0.35$, $P=0.007$)、糖尿病自己療養サポート($\beta = 0.52$, $P<0.001$)が自己療養行動の正の予測因子であり、女性では協調性($\beta = -0.44$, $P=0.012$)が負の予測因子であることが分かった。



20歳から45歳の男女の糖尿病患者を対象としたインタビュー調査から、療養行動が成功しやすい患者の特徴として、周囲の人に対してサポートを求めやすい資質がある可能性が考えられた。

本研究により、日本人の糖尿病患者において、東洋の文化的背景に由来する心理因子が糖尿病自己療養行動と関連することを見出した。協調性を重視する傾向そのものを療養指導で変えることは容易ではないと推測されるが、周囲の理解や支援が得られることで、協調性の高い患者においても療養行動を優先しやすくなる可能性がある。

糖尿病の患者の療養支援において、周囲からの理解や支援が受けられるように、患者の家族などに指導介入する方法は既に行われているが、この方法では効果の大きさや波及の範囲に限界があると推測される。今後は、周囲からの理解や支援が得られやすい患者自身に備わる要因について検討し、これを促進するべく患者自身に介入する方法を重視することで、これまでにない介入方法が実現する可能性が高い。

男：女	13：11
1型：2型：その他	10：11：3
年齢(歳)	40 (25-45)
HbA1c (%)	7.4 (5.6-10.7)
	中央値 (範囲)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Ikeda Kaori, Fujimoto Shimpei, Morling Beth, Ayano-Takahara Shiho, Harashima Shin-ichi, Uchida Yukiko, Inagaki Nobuya	4. 巻 9
2. 論文標題 Cross-cultural comparison of predictors for self-care behaviors in patients with type 2 diabetes	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Diabetes Investigation	6. 最初と最後の頁 1212 ~ 1215
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/jdi.12822	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 Mano Fumika, Ikeda Kaori, Uchida Yukiko, Liu I-Ting Huai-Ching, Joo Erina, Okura Mizuyo, Inagaki Nobuya	4. 巻 10
2. 論文標題 Novel psychosocial factor involved in diabetes self-care in the Japanese cultural context	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Diabetes Investigation	6. 最初と最後の頁 1102 ~ 1107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/jdi.12983	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Ikeda K
2. 発表標題 Cross-cultural predictors of self-management behaviours in type 2 diabetes.
3. 学会等名 55th Annual Meeting of the European Association for the Study of Diabetes(EASD)（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Mano F, Ikeda K, Uchida Y, Liu IH, Joo E, Okura M, Inagaki N
2. 発表標題 Interdependent happiness and better diabetes self-care were simultaneously observed in Japanese patients living in relation-oriented culture.
3. 学会等名 International Diabetes Federation Congress 2019（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 真能英美香、池田 香織、内田由紀子、Liu I-Ting Huai-Ching、城尾恵里奈、稲垣 暢也
2. 発表標題 2型糖尿病患者における自己療養行動と文化的背景に由来 する心理因子の関連について
3. 学会等名 第62回 日本糖尿病学会年次学術集会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力 者	内田 由紀子 (Uchida Yukiko) (60411831)	京都大学・こころの未来研究センター・教授 (14301)	